



唐獅子

午前中の講義が終わり、講師室に戻ると「今日の朝で父が亡くなりました」と、短くて、少々ぎこちない日本語でのメッセージが携帯に届いていた。それは、ミヤンマーからやって来ているシェイン君という若者からのメールであった。

1年ほど前、私が通う近所のジムに彼は入会してきた。だが、どうも勝手が分からず、困っている様子だったので、「大丈夫ですか?」と声をかけたことから、親しくなったのだ。生来、私は典型的なお節介りやきであるのだが、どうやらこれが「江戸っ子気質」というものらしい。

さて、このシェイン君だが、お国柄なのか、非常に真面目な性格で、コンピューターのプログラマーとして、とにかく良く働くのであった。ある日、「先生、ちょっと体調が悪いです」というので話を聞くと、「一日12時間から13時間労働は当たり前、徹夜作業もしばしばだったようなのだ。「僕が会社に話をしてあげようよ」と言うと、「大丈夫です。ありがとうございます。もう少し頑張ります」といって随分と耐えていたようである。3月の大震災で、多くの外国人が帰国した中でも、「怖い

鳥光 宏

決断の勇氣

ですけど頑張ります」と言って、彼は黙々と仕事を続けていた。「自国の軍事政権による矛盾への反発と、自己の将来のために、日本で仕事をしながら力を付ける決意を断ち切ってきたのです」と、真剣な眼差しで言っていた。

お父さんの亡くなる2週間前だった。「お父さん、癌で後2カ月の命だと連絡が来ました」と悲しそうな顔つきで彼が相談にやってきたので、「それじゃ、すぐに帰るなさい」と私は説得をした。しかし、なかなか会社との折り合いがつかない中で、「やっと来週帰れることになりました」と少しホッとしていたのだが、その帰国をあと2日に控えた日の、突然の訃報だったのだ。

そう言えば、私の父が亡くなった時もそうだった。あと5分早く到着していれば、生きていた父に会えたはずだった。「決断の勇氣を逃した己のふがいなきなのか、それとも、それが運命というものなのか」。かつて私も思い悩んだことがある。しかし、悲しみの中でもう一度立ち上がる勇氣というものも、皆にあると信じた。シェイン君のお父さんの御冥福を祈っている。(講師・作家)